

社会の発見 (Ⅲ)

—— 社会学の誕生 ——

赤坂 真人

The Genesis of Concept of Society (Ⅲ)

—— The Genesis of Sociology ——

Makoto AKASAKA

Abstract

Claud Henri de Rouvroy, Comte de Saint-Simon was born as a son of the French noble family (count) in 1760. However, he declared the renounce of a status of count when French revolution broke out, and led a rest life as an academician.

The theme of his study was to find the principle of social movement from agricultural society to industrial society. The core idea of his social thought was as follows. Along the progress of human's knowledge form a theological and metaphysical stage to a positivistic stage, their social forms would change from a feudalistic and militaristic regime to industrial and a peaceful regime. Auguste Comte who was a secretary of Saint-Simon. He succeeded to Saint-Simon's thought and gave a name his academic working "sociology". Comte's academic work had not been admired so much except the honor coined the name "sociology". But I will reevaluate him as a social thinker who observed the change from agricultural society to industrial society.

Key words : Saint-Simon, industrialism, Auguste Comte, sociology, social movement

キーワード : サンーシモン, 産業主義, オーギュスト・コント, 社会学, 社会変動

7. 補論：社会思想から社会学へ

7.1 先駆者としてのサンーシモン

通常, 社会学史は社会学という言葉を鑄造したオーギュスト・コントから始まるのを常とする。しかしながら社会学者の I. M. ツアイトリン (Irving

M. Zeitlin) や哲学者の山本誠作は, コントの主要な思想のほとんどは, すでにサンーシモン (Claud Henri de Rouvroy, Comte de Saint-Simon, 1760-1825) の著書の中で述べられており, コントはそれらを整理したに過ぎないと主張する¹⁰⁶。サンーシモンは実証主義の立場から, 「神によって創造され



Saint-Simon

た宇宙が重力の法則を通して秩序づけられているように、人間ならびに社会に関する諸現象も、科学により実証される諸法則によって秩序づけられていなければならない」と確信していた。

人間および社会に関する科学が実証的でなければならないというのは、それを迷信と形而上学から解放しようとする意志の表れであり¹⁰⁷、実証主義、産業主義、国際主義、新宗教といった観念でアプローチした独創性こそは、サン＝シモンをして十九世紀の重要な社会思想家のひとりたらしめた¹⁰⁸。

わが国の社会学者にはさほど知られていないサン＝シモンについて、坂本慶一の紹介に依拠し、簡単にその生涯を振りかえってみよう¹⁰⁹。クロード・アンリイ・サン＝シモンは1760年10月17日、伯爵家の長男としてパリで生まれた。若いころのサン＝シモンは血気盛んな若者で1778年軍隊に入隊し、翌年には騎兵大尉としてアメリカ独立戦争に従軍した。1783年にフランスに帰国し、1788年には歩兵大佐に昇任する。翌1789年フランス革命が勃発し、フランス社会は大混乱に陥るが、そのときサン＝シモンは革命に関与せず、革命中、サン＝シモン伯爵領である北フランスのピカルディ地方ファルヴィで、全住民を集め、自分は伯爵の称号を永久に放棄すると宣言した。実際、このリベラルなサン＝シモン伯爵は、その後、伯爵の称号を名乗らず、領主として租税をとりたてることもなく、一市民として学問に専心する生活を送った。

なぜサン＝シモンは革命に関与することを避けたのか。I. ザイトリンによれば彼は革命による破壊と流血を嫌い、しかもその革命が新たな社会を再構築する指針を与えていないと感じたからであった。彼は革命ではなく改良を、すなわち知識の進歩と人

類の運命の改善を目標とし、実証的な人間科学の構築と、産業主義による有機的な社会秩序の創造を志向した¹¹⁰。

自ら伯爵ではなく著述家と称したサン＝シモンは、まず1803年に『ジュネーブの一住民より同時代人への手紙』、1807年～1808年に『十九世紀の科学的研究序説』を出版する。これらは100部ほどの自費出版であったが、そこには後にコントに引き継がれた実証科学の思想が如実に記述されている。すなわちその主張を一言で言えば、現代は理神論から物理主義への過渡期にあり、以後は実証科学に基づき社会の再組織化を図らねばならないというものである。人類の知識は神学的から形而上学的に、そして最後に科学的な知識へと進歩してきた。現代は形而上学的知識から実証的知識への転換に伴い「封建的・軍事的体制」から「産業的・平和的体制」へ転換しつつある過渡期である。彼が「社会生理学」と呼んだ、新社会の統一を達成するための研究は実証科学に立脚したものでなければならない。それによって科学的知識が宗教的ドグマに、科学者と産業家が僧侶と貴族にとってかわり、新しいエリートとして登場すると主張した。

7.2 サン＝シモンの「産業主義」論

その後サン＝シモンは1814年に『ヨーロッパ社会の再組織について』、1816年～18年に『産業』、1820年～22年に『産業体制論』、そして1823年～24年に最後の書著である『産業者の教理問答』を出版する。晩年のサン＝シモンは業者階級（農業者・製造業者・商業者）に関心を寄せ、彼らが社会の最上位階級として位置づけられる社会体制の再組織化を主張した。これは科学技術に支えられた今日の産業社会の発展を予見した、当時としてはかなり先見性のある思想であると評価することができよう¹¹¹。彼の眼には産業の発展とともに封建体制は崩れ去り、封建領主は領地を失う。結果的に領地をめぐる戦争

は減少し、武力にたよる武士 (warriors) の地位は下落すると映った。「軍事的社会から産業的社会へ」。この命題は後にA. コントの思想を功利主義的自由主義の観点から再構成して提示したH. スペンサーの主要命題そのものである。

サン＝シモンは中世社会の精神的社会的統一と、それを可能にした精神的、世俗的エリートたちの同盟による社会秩序の維持を評価した。しかし来るべき時代はカトリック神学ではなく、科学的諸法則によって完成されなければならない。一切の知識は一つの科学的・実証主義的基礎に基づいて統一される。それは道徳的事実に関する考察とて例外ではない。サン＝シモンは『産業者の教理問答』において、文明の歴史は旧体制としての神学的封建的体制から形而上学的法律的体制を経て、科学的産業的体制へ進行するという三段階の進化の法則をコントに先んじて明示した。I. ザイトリンによれば彼の実証哲学を最初に認めたのはエミール・デュルケームであった (Emile Durkheim, 1858-1917)。デュルケームは『社会主義とサン＝シモン』の中で「実証哲学の観念、用語、概略すらが、サン＝シモンにはすべて見出しうる。…人が普通コントに与えている名誉を正しく与えるべき人は、サン＝シモンそのひとでなければならない」と述べ、実証主義社会学創始の面目もまたサン＝シモンに属するものであってコントに属するものではないことを主張した¹¹²。

サン＝シモンは実証主義に立脚し、ニュートン力学をモデルにしたにもかかわらず、社会のモデル化に関しては社会有機体説を使用した。社会を構成する諸階級諸階層はそれぞれの能力と機能を発揮しなければならない。そしてそこで中核的な役割を果たすのが産業社会の世俗的権力者たる産業者であり、同じく産業社会の精神的権力者たる科学者である。サン＝シモンがいかに科学者を重視したかは彼の政治論に如実に示されている。彼は著書『オルガニザチュール (組織者)』の中で、産業議会、審査

院、執行院という三つの議院からなる政治組織を提示した。第一議院は科学者、芸術家、技術者からなっており、彼らは種々の公共の計画を立案する。第二議院は科学者からなっており、彼らは計画を監督し教育を統制する。そして第三議院は産業家たちからなっており、計画を施行し、予算を統御する。そしてサン＝シモンは経済に関しても科学者が立案、監督し、産業家がこれを実行するという計画経済体制を思い描いていた¹¹³。

7.3 空想的社会主義

彼の政治論は過度ともいえる科学者重視と計画経済という点で、共産党政治局の89%がテクノクラート (technocrat: 上級技術官僚) であった旧ソ連の政治体制を想起させる¹¹⁴。筆者の言葉で言い換えれば、彼のいう第三議院の産業家が今日の政治家にあたり、第一議院と第二議院のメンバーは政策の原案を作成するテクノクラートである。テクノクラートとは高度な科学技術に関する専門知識と政策能力をもち、かつ国家の政策決定に関与する高級技術官僚を言う。現代日本の各省庁、とくに国土交通省や経済産業省、防衛省、気象庁などにも数多くのテクノクラートがいる。サン＝シモンの場合、政治家とテクノクラートの区別ができておらず、かつ政策の執行に不可欠なビューロクラート (bureaucrat: 高級事務官僚) への言及がないが、彼自身はそのメンバーでもあったフランス絶対王政のもとで、近代的な政治組織を構想した彼の慧眼には刮目すべき点がある。サン＝シモンはフランス啓蒙主義の最後の寵児であり、1840年代から大きなうねりとなった実証主義の真の開祖であった。

「サン＝シモンはヘーゲルと同時代に、しかし彼に依存しないで、著しく類似の歴史発展の概念を前進させた。ヘーゲルは社会発展史を理性の一層の実現と見ていた。サン＝シモンはこの理性の役割のかわりに科学的知識をおきかえていた。二人の思想家

は諸段階を前進する史的発展について考えていた。サン＝シモンにとってもヘーゲルにとっても、各々の段階はある程度の合理性を、そしてそれゆえ、ある程度の必然性を具体化していた。二人の思想家は発展と進歩とを対立する諸力の闘争であると見ていた¹¹⁵。ゆえにサン＝シモンにとってフランス革命は歴史的発展の必然的結果であった。

彼は述べる。「旧制度においては、社会は基本的に人間たちによって統御されていた。新制度においては、それは原理によって統御される」。新社会は科学によって管理され、いわゆる政治は存在しない。現実性は乏しいが「科学者による管理」もまた政治の一形態であると考えれば、「政治は存在しない」という発言は論理的に矛盾しているが、サン＝シモンの真意は絶対王政の否定にあった。次世代の自由主義者も社会主義者も彼の科学に基づいた社会的進歩・発展への確信を「空想的」と嘲笑したが、現代政治が多数のテクノクラートとビューロクラートに支えられて遂行されていることを想起すれば、彼の洞察は決して的はずれなものではない。もっともそれは現代政治の観点からサン＝シモンの思想を検討する場合にのみくだされる判断ではあるが。

7.4 「封建的・軍事的体制」から「産業的・平和的体制」へ

最後にサン＝シモンの「封建的・軍事的体制」から「産業的・平和的体制」という社会変動論について検討しておこう。この社会変動は「農業社会から工業化社会さらにはサービス産業化社会」への転換として読むことができる。しかしその後の人間社

会の歴史を振り返る時、この社会変動論には大きな弱点があることに気付く。それは19世紀後半から20世紀半ばまでヨーロッパを中心に起こった人類史上最悪の戦争である。農業社会における富の源泉は農産物であるから、封建領主たちによる領土争いが生じる。しかしサン＝シモンの考えに従えば、産業社会への転換によって、農業は工業に主役の座を明け渡し、結果的に領主と武装した家臣団の必要性は衰微し、没落してゆく。その結果社会は「平和的体制」に移行するはずであった。この2度にわたる世界大戦をどう考えればよいのか。

ここではウラジーミル・イリイチ・レーニン（1870-1924）の帝国主義論に従って、20世紀に人類が経験した2つの世界大戦は、産業革命の結果、農業社会から工業社会への転換が生じ、やがて資本主義経済が高度に発展した国々が工業製品を生産する資源と、それを販売する市場をめぐって引き起こした侵略的植民地争奪戦争であったとしておく。産業革命はイギリスで始まり1760年代から1830年ころまで徐々に進んでいったと考えられているが、それはまさにサン＝シモンの生涯と一致する。彼が生きた時代状況や産業社会の担い手となる「業者階級」という用語からの推測であるが、サン＝シモンは産業革命が工業革命であり、複数の高度に発展した工業社会が資源と市場を求めて人類の予想をはるかに超えた世界大戦を引き起こすことを予見しえなかった。コントやスペンサーに続く第二世代の社会学者たちに一笑に付された彼の思想は、むしろグローバリゼーションが進展する現代世界において実現されつつあると言えよう。彼のアイデアが実現するには、

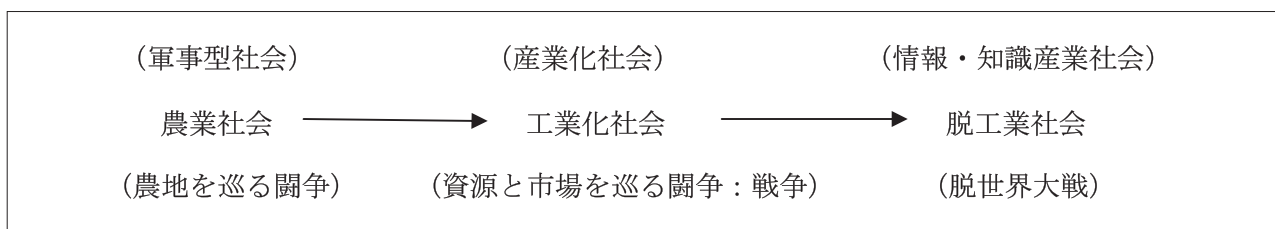


図7-1 サン＝シモンの社会変動図式の修正図（著者作成）

人類は産業化（工業化）の時代を過ぎて、ダニエル・ベル (Daniel Bell, 1919–2011) の脱工業化社会 (*The Coming of Post-Industrial Society*: 1973) の到来を待たねばならなかった。彼の求めた平和的体制は工業社会からサービス産業化社会または知識・情報産業社会へのさらなる転換を待たねばならなかった¹¹⁶。

7.5 オーギュスト・コント



オーギュスト・コント
(Isidore Auguste Marie
Francois Xavir Comte,
1798–1857) は1798年、
フランス革命から9年
後、南フランスのモンペ
リエに生まれた。1804年、

彼が6歳の時、ナポレオンが帝位につき共和制は崩壊、第一帝政が始まる。しかし1814年、ナポレオンはエルバ島に追放され、ルイ18世による王政復古が実現する。この年、モンペリエのリセを卒業したコントはパリに出てエコール・ポリテクニク (École polytechnique) に入学したが、共和制を主張する学園紛争に関与したことで退学処分となり、家庭教師をしながら不安定な暮らしを送ることになる。だが1817年の夏、コントの思想に決定的な影響を与えたサン＝シモンに出会い、彼の秘書となった。

コントはサン＝シモンから実証主義と産業主義の思想を受け継ぎ、1822年フランス革命後の混乱した社会と思想を再組織するプランを素描した「社会組織に必要な科学的作業のプラン」という論文を発表した。この論文の要諦は、これまでの社会の再組織が失敗に終わったのは、人々が世俗的権力の改造にのみ注目し、その前提となる精神的再組織が欠けていたからである。ゆえに現状における喫緊の課題は、新しい社会秩序の精神、およびこの精神に沿った一般思想体系の構築を、社会関係の体系や行政方式な

どにかかわる仕事とは切り離して実行することである¹¹⁷。そしてこの再組織化の作業にあたって理論的作業の指導にあたるのが学者階級であり、現実の世俗的活動を実践するのが産業者である。こうして「樹立されるべき組織のなかでは、精神的権力は学者の手に、世俗的権力は産業指導者の手に握られる」ことになる¹¹⁸。その後コントはサン＝シモンのもとを離れ、1826年より少数の聴講者を相手に哲学の講義を開始した。これを編集したものが彼の主著『実証哲学講義全六巻 (1830–42)』である。

7.6 コントにおける産業主義のテーゼ

コントもまたサン＝シモンと同様「産業主義のテーゼ」を展開した。彼によれば、今「神学的・軍事的」という社会が死滅し、「科学的・産業的」社会が誕生しつつある。中世ヨーロッパはカトリックに対する超越的信仰によって一つにつながっていた。その社会の思想を支えたのは僧侶および神学者であり、俗世を支配したのは軍人たちであった。しかし今やこのような旧社会は崩壊し、新しい社会が生まれつつある。その社会の思想を担うのは科学であり、俗世は（資本家、経営者、金融家をすべて含む）産業者によって担われる。「人間が科学的に考えるようになった瞬間から、人間集団の主要な活動は人間の人間に対する戦いでなくなり、人間の自然に対する戦い、天然資源の系統的開発の努力となったのである」¹¹⁹。この文章にはトーマス・ホッブズが透けて見える¹²⁰。また社会変革の基礎条件を知的変革に求めたことは、経済学者ヨーゼフ・アーロイス・シュンペーター (Joseph Alois Schumpeter, 1883–1950) のイノベーション (生産手段の新結合：経済活動の仕組みの抜本的変化)¹²¹による経済発展を想起させる。

確かにコントの初期の論考はサン＝シモンの影響を強く受けている。しかし「神学的・軍事的」社会から「科学的・産業的」社会への転換に焦点を

定めたがゆえに、彼の思想はホッブズ（Thomas Hobbes 1588-1679）からジョン・ロック（John Locke 1632-1704）およびシャルル＝ルイ・ド・モンテスキュー（Charles-Louis de Montesquieu, 1689-1755）を経て確立された国民権論、ジャン・ジャック・ルソー（Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778）の社会契約論へ収斂せず、サン＝シモンの社会主義的思考やマルクスの革命理論とも異なる道筋をたどった。コントと言えば「社会学」という用語の鑄造者としての名誉だけが与えられるのが常であるが、加えて彼はマルクスと同様に「農業社会から工業社会への転換」という社会変動を観察した社会学者であった。

コントは産業化の結果生じる社会の経済的發展について大なる期待を抱いたが、その結果生じる労働者と資本家の階級形成や資本家への富の集中、両者の闘争に関しては無関心であった¹²²。この点は労働者の生活保障を資本家の良心に期待したサン＝シモンと見解を異にしており、同時代を生きたマルクスとは決定的に異なっていた。

7.6 社会学の構想

コントの問題意識は一貫して、当時のフランスおよび欧州全体に広がっていた無政府状態に終止符を打ち、新たに統一された社会を再構築することであった。彼はサン＝シモンにならない人間精神は神学的段階（現象の原因を神などの想像上の存在のはたらきとして解釈する思考形態≒宗教）から形而上学的段階（現象の原因を論理的で抽象的な原理によって説明しようとする思考形態≒哲学）を経て実証的段階（現象の原因を観察と実験による実証的な事実）に求めようとする思考形態≒科学）へ進歩するという「三段階の法則」を呈示し、新しい社会の統一は実証主義精神に基づいて形成されると主張した。そして諸科学はこの三段階の法則に従って、最も単純な研究対象を扱う数学から始まって、天文学、物理

学、化学、生物学、そして最後に最も複雑な対象を扱う実証的 sociology が成立すると考えた¹²³。

ここで社会学を「社会科学」一般に拡大して考えれば、この考え方は現代でも通用する。しかしながら「三段階の法則」は修正が必要である。コントのニュアンスでは神学的段階と形而上学的段階は時代遅れの思考法として葬り去られる運命にあるが、実際はそうではない。現代社会でも宗教や哲学は依然として生き残っており、宗教は生きる「意味」について考え、哲学は倫理や道徳と言った価値・規範の思考の基礎としてだけでなく、科学哲学として「科学的認識の原理」を提供し続けている。

コントもまたサン＝シモンと同様にフランス革命とその精神的支柱である啓蒙思想を批判した。彼によれば啓蒙思想は単なる形而上学的フィクションであり、それは旧体制を崩壊させ、次の段階への道を開いたという点において進歩に貢献したに過ぎない¹²⁴。最初、コントは、この「社会現象に固有の基本的法則全体を明らかにする実証的研究」を「社会物理学」と呼んでいた。しかしこの用語は、ベルギーのアドルフ・クエテレ（Adolph Quetelet）という学者がすでに使用していたので、『実証哲学講義』第4巻第48講でラテン語の *socius*（仲間、同類、社交）とギリシャ語の *logos*（言葉、理性、理論）を結びつけ「社会学（*sociologie*）」という名称に変更した¹²⁵。

アロンが言うように、コントが社会学を生物学に続くものと考えた時から、彼の社会学は有機的な性質を帯びるようになったとあってよい¹²⁶。無機物を扱う物理学・化学は分析的であるが、有機体である生物を研究対象とする生物学は総合的である。社会学はすべての社会科学を含む学問の女王であるとして総合社会学を構想したのは勇み足であったが、彼の社会有機体説は間違いなく、その後の生物学的社会システム理論に影響を与えた。

コントの実質的な処女作となった「社会組織に必要な科学的作業のプラン」は、新たな社会制度の構

築という明確な目的と秩序化という価値意識を前提としている¹²⁷。そして現在の社会状態はそれに先行する社会の必然的結果であり、同時に後続する社会の原動力となる。コントの社会学はこの社会状態の歴史的発展、すなわち進歩の法則を明らかにする「社会動学」と、社会を一種の有機体とみなし、その内部でいかに人間有機体が社会有機体の協業・分業に従属するかという人類の共存と連帯の問題、すなわち秩序に関する理論である「社会静学」からなる¹²⁸。現代の観点から「コントの社会理論は当時のヨーロッパ社会、とりわけフランス社会の観察から帰納された知見にすぎない」と批判することは容易である。しかしその後、世界の国民社会の歴史は近代化（西欧化）という方向を目指すことで一致したということではできらる。今日に至るまで産業化と科学的思考の優位は失われていない。

コントの社会学は彼が唱えた「実証哲学」の一分野であった。実証哲学とは「科学的研究により発見された多種多様な一般法則の原理を、より少数の一般原則へ還元する」営みを指す。その発想法はある意味でトーマス・クーン（Thomas Samuel Kuhn: 1922-1996）のパラダイム論（*The Structure of Scientific Revolutions*: 1962）に似ているが、コントのそれは社会学を諸科学の女王とする点で未だ形而上学的なグランドセオリー（誇大理論）の発想か

ら抜け出していない。

コントは社会学を「社会物理学」と呼び、社会現象を物理学のように研究し、そこに自然法則のような因果律を見出すことを理想としていた。実証主義者とは科学の至上性を信じる人々である。神学や形而上学は「唯一絶対」の真理を主張する。ゆえに神や宇宙や人間を含むすべての存在とその本質は「唯一絶対の真理（原理）」によって説明される。しかし実証主義においては、その思考を「絶対知」から始めることは許されない。実証科学においては現象を観察し記述し、分析し、法則命題を導くことが重要なのであり、想像による「絶対知」の構築は許されない。社会学を含むコントの実証哲学の真価は、このように「絶対知から相対知へ」の転換を知らしめたことにあるのではないか。この実証的発想は今日まで受け継がれているが、残念ながら彼はそれを実践する方法を持たなかった。結果的にその実践はエミール・デュケームなど第二世代の社会学者の登場を待たねばならなかったが、彼の社会有機体説はイギリスのハーバード・スペンサーに¹²⁹、無産階級概念はカール・マルクスに強い影響を与えた。

産業化のテーゼに関する補論

サン＝シモンとコントの著書の中で、現代にも通用する部分は「産業化のテーゼ」である。これに関

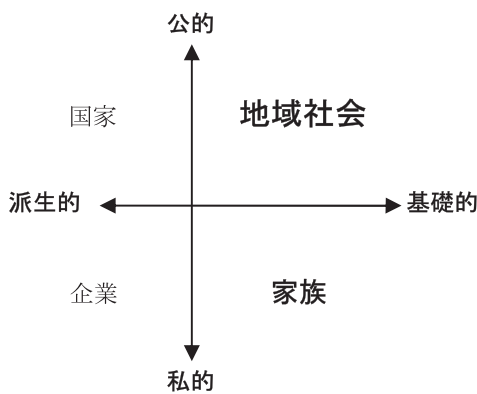


図7-2 農業社会

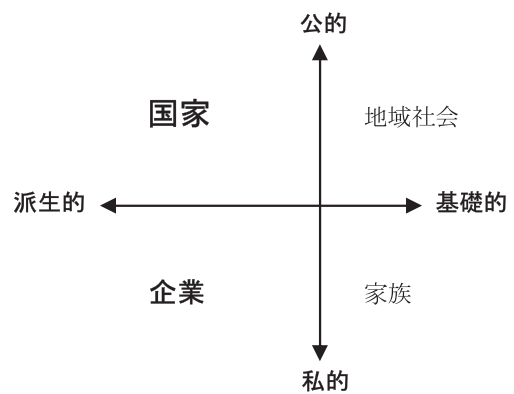


図7-3 工業社会

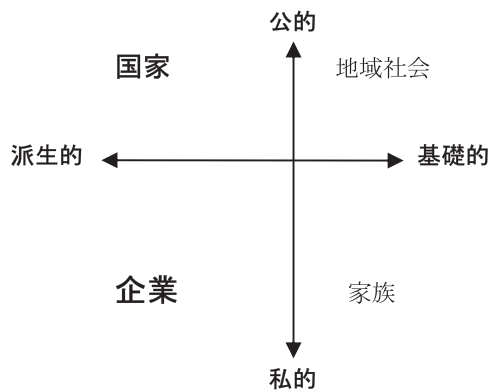


図7-4 脱工業化社会

する論述は農業社会から工業社会または家族・地域社会を中心とするゲメインシャフトから企業（利益の獲得を追求するあらゆる集団）が中心となるゲゼルシャフトへの社会変動を先取りしたものと考えることができる。「基礎的-派生的」「公的-私的」という二つの軸を交差させ四つの象限を構成すると、そこには地域社会・国家・企業・家族という四つの社会集団を想定できる。

前近代的な農業社会では家族と地域社会が中心であり、家族の生産、消費は地域社会の中で充足される。しかし工業化社会に転換すると国家と企業の役割が大きくなり、村落共同体的な地域社会は崩壊し、家族の絆も弱体化する。そこで弱体化した地域社会と家族の機能を補完するために、医療や介護、年金

や失業・労災に国家が介入するようになる。いわゆる福祉国家の成立である。他方、工業化に成功した国家は資源と市場を求めて他国と帝国主義戦争を始め、国民を強制的に兵士として戦場に送る強権的国家・独裁国家となる場合もある。しかし脱工業化が進展し、知識・情報サービス産業社会の段階に至ると、サン・シモンとコントの予言通り、資源や他国民からの略奪を目的とする侵略戦争の必要性は弱まり、グローバリゼーションの進展やEUのような複数の国民国家統合に象徴されるように、戦争の危険性は低下する。

この段階にあって人々の生活に大きな影響力を及ぼすのは企業と市場である。現代の先進国では市場原理主義が様々な生活領域に侵入し、あらゆるものが貨幣というメディアによって取引されるようになった。近年、20世紀を代表する政治哲学者であるジョン・ロールズ（John Rawls, 1921-2002）をコミュニタリアニズム（共同体主義者）の立場から批判したマイケル・サンデル（Michael Sandel: 1953-）のハーバード大学での講義がテレビで放映されたことから、世界中で「正義」についての議論がブームとなった。その火付け役となったマイケル・サンデルが2012年に執筆した“*What Money Can't Buy*”で「市場における正義」を論じていることが、この事実を象徴している¹³⁰。

脚注

106 「サン・シモンの哲学は、事実上コントの全観念がそこで発生し、コントがそれをたいそう下品にも剽窃した」（Zeitlin, I. M, *Ideology and The Development of Sociological Theory*, 1968, Published by Prentice-Hall, Inc., Englewood Cliffs, New Jersey, U.S.A. I. M. ツアイトリン著、山田隆夫訳『社会学思想史（上）』風媒社、1976年、pp.94-5）。「学者たちが今日定説にしているのであるが、サン・シモンは一八一四年以前に彼の主要な諸観念を発展させたのであって、テリエとコントはそれらをあとになって自分たちの独創だと言ったのである」（I. M. ツアイトリン、同訳書、p.96）。「一般に『社会学』の創始者はコントとみなされているのであるが、コントの神学的、形而上学的、実証的という三状態についての法則とか、諸科学の位階主義的分類とかの根本的な諸概念は、萌芽的な形で既にサン・シモンの諸著作に見られる。なるほど、サン・シモンはコントのように社会学なる用語は使用しなかった。けれどもその代わりに、『人間の科学』、『社会の科学』、『生理学』、『社会的生理学』、『政治の科学』

- などの諸用語を使用したのである」(山本誠作『西洋社会思想史』松籟社, 1983, p.161.)
- 107 山本誠作, 1983, 同上書, p.161.
- 108 I. M. ツアイトリン, 1968, 同上訳書, p.96.
- 109 坂本慶一訳, 1975, 「産業者の教理問答」『世界の名著 8 オウエン サン・シモン フーリエ』中央公論社, pp.47-62.
- 110 I. M. ツアイトリン, 1968, 同上訳書, pp.96-8. 秋元律朗によれば, コントの「三段階の法則」はサン・シモンから借用したものを展開したにすぎないが, サン・シモンのそれも, 実はコンドルセ (Marie Jean Antoine Nicolas de Caritat. Marquis de Condorcet, 1743-94) から借用したものであった (秋元律朗, 1997, 『市民社会と社会学的思考の系譜』お茶の水書房, p.23.)
- 111 サン・シモンが「産業」という言葉を使うとき, 富永健一によれば, それは「フランス革命の『破壊』に対置されて『生産』することを意味し, そのために勤勉に働くことを意味していた」(富永健一, 2006, 『理論社会学の可能性』新曜社, p.9). 産業を意味するindustryに「勤勉な」という意味があるのは偶然かもしれないが, 興味深い事実である.
- 112 Durkheim, E., *La Socilisme: sa definition, ses debuts, la doctrine saint-simonienne*, 1928, edite par M. Nauss, Paris. デュルケーム, E. 森博訳, 1977, 『社会主義およびサン・シモン』恒星社厚生閣, p.128.
- 113 I. M. ツアイトリン, 1968, 同上訳書, pp.103-5.
- 114 Graham, Loren R. 1993, *The Ghost of the Executed Engineer: Technology and the Fall of the Soviet Union*. Cambridge University Press, p. 74.
- 115 I. M. ツアイトリン, 1968, 同上訳書, p.109. サン・シモンの言う産業者とは「社会のさまざまな成員たちの物質的欲求や嗜好を満たさせる一つないいくつかの物的手段を生産したり, それらを彼らの手に入れさせるために働いている人たちである…これらの産業者は農業者, 製造業者, 商人と呼ばれる三大部類をなしている」. 「産業者階級は最高の地位を占めるべきである. なぜなら, 産業者階級はあらゆる階級のうちで最も重要な階級であり, 産業階級者はほかのすべての階級がなくてもすませるが, ほかの階級はいずれもみな産業階級者なしではやっていけないからである」. しかし「産業者は, 現在の社会組織によって, すべての階級のうちで最下位におかれている」. (Saint-Simon, *CATECHISME DES INDUSTRIELS, 1823-1824*. サン・シモン著 森博訳『産業者の教理問答』岩波文庫, 2001年, pp.10-11.)
- 116 知識・情報産業社会では価値を生む源泉が知識や情報処理, 技術革新へ変化する. 現代世界で流通している貨幣の90%以上が, 為替・株式の売買や, さまざまな金融派生商品, 企業買収などのマネーゲームで使用されている事実がこの状況を象徴している. このようなマネー経済のもとでは武力は重要な意味を持たない. ゆえに, この段階に至ってはじめて「平和的体制」が確立される. 現代のようなグローバル化した世界社会にあっては, 経済的な互惠関係が政治的対立・武力闘争を抑止する強い力となりうる.
- 117 Comte, A., *Plan des travaux scientifiques necessaires pour reorganizer la sossiete*. 霧生和夫訳, 1970, 「社会再組織に必要な科学的作業プラン」『世界の名著36 コント, スペンサー』中央公論社, p.72.
- 118 A. コント, 同上訳書, p.72.
- 119 Raymond Aron, 1965, *Main Currents in Sociological Thought I*, published by Basic Books Inc. New York. (レイモン・アロン著, 『社会学的思考の流れ』北川隆吉/平野秀秋/佐藤守弘/岩城完之/安江孝司訳, 1974, 法政大学出版社. 水田洋・安川悦子・安藤隆徳編著, 1991, 『社会思想史への招待』北樹出版. p.86.
- 120 レイモン・アロンによればコントにとって, アリストテレスから彼自身に至るまで, 言及に値する政治哲学者はトーマス・ホップズだけであった. 「なぜならホップズはあらゆる社会が實力によって支配されており, また支配されねばならない (ねばならないとは, 不可避であることと, それが望ましいという両方の意味で) ということを明白に見て取ったからである. 社会における實力とはなにかといえば, それは数であり富である. かくして, ここにはユートピアも幻想も理想主義も介在する余地はない」(Raymond Aron, 1965, 同上訳書, pp.131).

この言明からすれば、コントは夢想家ではなく、徹底したリアリストであることになる。彼が産業社会における階級分化の問題にまったく無関心であった理由はここにあるかもしれない。

- 121 それは「新しい生産方法の導入」や「新しい財貨の生産」という技術にとどまらず、「新しい販路の開拓」や「新しい組織の実現」といった経済、経営全般の革新を含む。
- 122 Raymond Aron, 1965, 前掲訳書, pp.96-102.
- 123 ツアイトリンも指摘しているが、アロンによれば、コントの「人間精神の三段階の進化」に関する思想は、モンテスキューの決定論（法の精神）とコンドルセの進歩の概念（人間精神進歩の歴史的展望）から借用したものであると言う（Raymond Aron, 1965, 同上書, Pp.108-9）。とすれば、コントは明らかにフランス啓蒙主義の最後の継承者であったと言えよう。
- 124 I. M. ツアイトリン著, 前掲訳書, p.121. コントは実証主義の立場から啓蒙思想を形而上学として批判した。興味深いことに実証主義者である第2世代の社会学者V. パレートも自然法思想を形而上学として激しく批判している（Pareto, V., *Trattato di Sociologia Generale*: G.Barbera, 1916. *The Mind and Society. A Treatise on General Sociology.*, Translated by Andrew Bongiorno and Arthur Livingston, 1935, § § 401-66）。
- 125 Kenneth C. W. Kammeyer, George Ritzer, Norman R. Yetman, *Sociology, experiencing changing societies*, Ally and Bacon, 1992, p. 18.
- 126 Raymond Aron, 1965, 前掲訳書, p.89.
- 127 彼の死から7年後に社会科学における価値判断の問題を論じたマックス・ウェーバーがプロイセン王国に生まれる。この時点でコントに目的論や認識における価値判断の混入についての批判を突きつけるのは少々酷というものだ。
- 128 新睦人・大村英昭・宝月誠・中野正大・中野秀一朗著『社会学のあゆみ』有斐閣新書, 1979, p.5.
- 129 富永健一によれば、コントの思想をハーバート・スペンサー（Herbert Spencer, 1820年-1903年）に橋渡しをしたのはジョン・スチュアート・ミル（John Stuart Mill, 1806-1873）であった（富永健一, 2006, 『理論社会学の可能性』新曜社, p.24）。
- 130 コントによれば人民の原理は「各個人理性の主権」であった。現代社会のイデオロギー論争はリベラリズム（革新）対カンサーバティズム（保守）と完全自由主義（リバタリアニズム）対オーソリタリアニズム（権威主義）の4次元で行われているが、この分類で言えばコントは政治的にはリベラリストであり、経済的には保守主義者であったと言える。このことは彼が「社会の無秩序状態」を解決すべき最大の課題としていたことからわかる。（Comte, A., 前掲論文訳書, p.15）。

文 献

- 秋元律朗, 1997, 『市民社会と社会学的思考の系譜』お茶の水書房。
- 新睦人・大村英昭・宝月誠・中野正大・中野秀一朗著, 1979, 『社会学のあゆみ』有斐閣新書。
- Bell Daniel, 1973, *The Coming of Post-Industrial Society: A Venture in Social Forecasting*, Basic Books, 1973.
- Collins, R. & Makowsky, M., *The Discovery of Society*. R. コリンズ, N. マコウスキー共著, 大野雅敏訳, 1987, 『社会の発見』東信堂。
- Comte, A., *Plan des travaux scientifiques necessaires pour reorganizer la sosiete*. 霧生和夫訳, 1970, 「社会再組織に必要な科学的作業プラン」『世界の名著36 コント, スペンサー』中央公論社。
- Durkheim, E., *La Socilisme: sa definition, ses debuts, la doctrine saint-simonienne*, edite par M. Naus, Paris, 1928. 森博訳, 1977, 『社会主義およびサン・シモン』恒星社厚生閣。
- Kenneth C. W., Kammeyer, George Ritzer, Norman R. Yetman *Sociology, experiencing changing societies*, 1992, Ally and Bacon. 串田孫一責任編集, 1965, 『世界の名著29 ヴォルテール, デイドロ, グランベール』中央公論社。

- Kuhn Thomas, 1962, *The Structure of Scientific Revolutions*, The University of Chicago Press.
- Raymond Aron, 1965, *Main Currents in Sociological Thought I*, published by Basic Books Inc. New York. レイモン・アロン著, 『社会学的思考の流れ』北川隆吉/平野秀秋/佐藤守弘/岩城完之/安江孝司訳, 1974, 法政大学出版局.
- 水田洋・安川悦子・安藤隆穂編著, 1991, 『社会思想史への招待』北樹出版.
- Montesquieu, C. L., 1748, *De l'Esprit des Lois*. モンテスキュウ著 稲本洋之助・上原行雄・田中治男・三辺博之・横田地弘訳, 1987, 『法の精神 (上) (中) (下)』岩波文庫.
- M.Riedel, *Gesellschaft*, O. Brunner, W. Conze and R. Kosclleck (eds.), *Geshichtliche Grundbegriffe, vol. 2*, 1975, Stuttgart, Klett. 河上倫逸・常俊宗三郎, 1990, 『市民社会の概念史』以文社.
- 森嶋通夫, 2010, 『なぜ日本は没落するか』岩波現代文庫.
- Saint-Simon., *CATECHISME DES INDUSTRIELS, 1823-1824*. サン・シモン著 森博訳, 2001, 『産業者の教理問答』岩波文庫. 坂本慶一訳, 1975, 「産業者の教理問答」『世界の名著〈続8〉オウエン サン・シモン フーリエ』中央公論社, pp.299-436.
- Sandel Michael J., 2012, “*What Money Can't Buy*” *The Moral Limits of Markets*, マイケル J.サンデル, 2012, 『それをお金で買いますか』鬼澤忍訳, 早川書房.
- 田中浩 田村秀夫編集代表, 1982, 『社会思想事典』中央大学出版部.
- 富永健一, 2006, 『理論社会学の可能性』新曜社.
- 宇賀博, 1971, 『社会学的ロマン主義』恒星社厚生閣.
- 友枝敏雄, 1998, 『モダンの終焉と秩序形成』有斐閣.
- Voltaire: *Lettres Philosophiques, edition critique a vect une introduction et un commentaire par Gustave Lanson, nouveau triage revu et complete par Andre M. Rousseau*, Paris, Didier 2 vol., 1964. 『ヴォルテール 哲学書簡 哲学辞典』中川信・高橋安光訳, 中公クラシックス, 2005.
- 山田誠作, 1986, 『西洋社会思想史』松籟社.
- Zaitlin, I. M, *Ideology and The Development of Sociological Theory*, 1968, Published by Prentice-Hall, Inc., Englewood Cliffs, New Jersey, U. S. A. I. M. ツアイトリン著 山田隆夫訳, 1975, 『社会学思想史 (上)』風媒社.